

文化展望

bun•ten

Specialized magazine for
Art and Culture

5758

合併特大号

日伊国交樹立一五〇周年記念大特集



World Art Topics

日本イタリア国交樹立150年記念「カラヴァッジョ展」、
ルネサンス検証の権威と現代のシエナ芸術家が二巨匠展を考
—芸術無終— 奥谷 博展 ギャラリートーク
第92回白日会展 公開クロッキー講座
「放哉を書く 柴山抱海書展」開催記念
特集「郷土に想いを馳せる」書家 柴山 抱海



「桃紅柳緑」

日本イタリア国交樹立一五〇年を記念して本年三月に開催された「日本イタリア友好教育美術展」において、工芸作家である片山寛美氏が「真の芸術家」として芸術の剣を獲得した。

氏は装飾品という概念の殻を破り、鑑賞作品であることも兼ね備えた作風で、鑑賞者を魅了している。

片山作品は、絵画の要素も取り入れ、ジャンルの隔たりを無くしたような総合芸術として今日開花している。



魅惑のジュエリー工芸作家

片山 寛美
bun-ten 注目の匠

- 日伊芸術鼎談 芸術が社会に成すべきこととは？
- 日本イタリア友好教育美術展秀作撰



日伊国交樹立150周年を記念し、イタリア・シエナのアートシーンのトップを走るプリズマ・マルチメディア協会会長を務めるダニエリ・サッソン博士とイタリア・ルネサンスの記録誌「美術家列伝」や「彫刻家列伝」検証の第一人者として知られるピエールジャコモ・ペトリオーリ博士、そしてWACの協力によって、日本シエナ芸術家協会が創設されることになり、両博士とWAC各顧問の選出によって創立会員が決定し、その記念として美術教育を主軸とした日伊芸術鼎談を今春、東京都現代美術館 MOT にて実施致しました。

芸術鼎談は両国の友好の絆を深めると共に同協会が掲げる平和理念に基づいた国際交流を実施し、社会の平穏を祈ることを目的としております。本誌では、創立会員に選出された美術家の活動や作品から“芸術が成すべきこと”を検証するほか、世界平和を考えていく対話の模様を誌面にここに紹介します。

- 左頁写真：工芸家 片山寛美
 - 右上：ピエールジャコモ・ペトリオーリ
 - 右下：ダニエーレ・サッソン
- ※両博士詳細は本誌P-32に紹介。

はこととまき

ピエールジャコモ・ペトリオーリ（以降…ペトリオーリ）
 本日は、日本美術家の作品を通じて「芸術が社会に成すこと」を検証してゆきます。
 早速ですが、この作品の解説をお願いします。

片山寛美先生（以降…片山）

「花紅柳緑」（※一二頁）は、日本の春の花々の美しさを表現した作品です。四季の中でも春は色とりどりの花が咲き誇る色彩に富んだ季節ですので、その華やきを表現しました。

七宝焼きで春の情景を表現し、周りをワイヤーレースで囲むことでより華やかさを表してみました。

ペトリオーリ 展示会場でも一度じっくりと拝見して参ります。とても細かな装飾で辛抱強くデザインされていることが分かります。

現代アートと伝統技術の融合したジャンルであるように感じます。伝統的な七宝焼がワイヤーレースでデコレーションされた様相は、一五世紀のヨーロッパの聖書の装丁を思わせます。

それは、金糸とエナメルを組み合わせて装飾している大変豪華なものです。当時、聖書自体を信仰対象として扱っていたように感じます。

東洋の芸術家の作品であるという先入観のせいかも知れませんが、「花紅柳緑」は仏教でいうところの曼荼羅に見えてきます。ですから先生の作品制作における哲学が気になりました。

片山 私は感動した情景を作品の中

日本イタリア国交樹立 150 周年記念

日伊芸術鼎談

「芸術が社会に成すべきこととは？」



芸術が成す

に閉じ込めたいと考えておりまして、鑑賞者が情景を思い浮かべるような作品を作りたいと考えております。

七宝焼きの中に景色を閉じ込め、ワイヤーでジュエリーに風景画のような広がりや奥行きを表現するのです。それが私の哲学かと思えます。

ペトリオーリ 成る程。ジュエリー全体の制作というよりも、七宝焼による表現の探求と言った方が近いのかも知れませんね。

片山 確かに、七宝焼きに出会うまでは、天然石でジュエリーを手掛けており、その頃は博士の言うようにジュエリーの美しさというものを単純に追い求めていたように思います。

七宝焼きに出会い、そこに情景を描き、閉じ込めることが出来るというところに気が付き、作品の表現に広がりを見出してからは只管に七宝焼きに夢中になっています。

ペトリオーリ「花紅柳緑」の七宝焼きの部分には爽やかなグリーンをベースに花が咲き、蝶々が舞う情景

鼎談出演者

工芸家 片山寛美

プリズマ・マルチメディア協会
会長 ダニエリ・サッソン

元フィレンツェ大学教授
ピエールジャコモ・ペトリオーリ

が描かれており、春の訪れを喜び合う生命達の讃歌が聴こえてきそうです。

ワイヤーレースの部分は色彩を抑えて、七宝の画面の奥行きを広げる他に、各七宝のイメージを繋いでいます。この「繋げて、広がる」という用途を蔓と葉をイメージしたワイヤーで行っているところに作家の感性が伝わってきます。

因みに片山先生は作品を制作する際に、装身具としての意味合いを込めて制作されますか。それとも鑑賞する用途で制作されましたか。

片山 先程ベトリオリ博士が仰っ

ていた中世の聖書のように、贅沢を尽そうと思えば幾らでも豪華なものを作ることが出来ますが、私の作品はワイヤーという取って安価な素材を用いてレースを編んでいることからも分かるように、気軽にジュエリーを楽しんで欲しいという気持ちで込めています。

だからと言って鑑賞に堪えないものではなく、結局のところ、鑑賞することにも身をつけることもどちらも考慮して制作しています。

ダニエーレ・サッソン（以降サッソン）もしかして、本日身につけ

ているネックレスもご自身で作られたものですか。

片山 ええ、その通りです。

サッソン このジャンルに至った理由は何かですか。

片山 ワイヤーを編む基本的な技術については教えてもらいましたが後は独学です。七宝は娘の絵画の先生が七宝焼きも手掛けておりましたので教えて頂いたのがきっかけです。

サッソン 私は無粋な人間なので、ジュエリーについて解説出来るよう

な知識を持ち合わせておりませんが、作品として非常に素晴らしいものだと思っています。

春という季節を表現しておりますが、もう一つのメッセージとして「誕生」というテーマを感じます。

私はロシアのロマノフ王朝時代に作られたインペリアル・イースター・エッグのような印象を受けました。

構図に目が魅かれたのですが、シンメトリーのように見えて少しずつバランスを変えていますね。

片山 敢えてバランスを崩しています。

いくつも編みであるモチーフをあちこちに配置しながら構図を考えています。でもそも同じものを用意していないこと、そして人間の身体自体も左右対称ではないので敢えて少しバランスを崩した方が身につけた時にも引き立つように思います。

ベトリオリ 芸術家個人の考えや時代の傾向にも寄りますが、シンメトリーという法則のもと作られることも多く、調和のとれた左右非対称がもっとも美しいと考えております。

その点で片山先生の作品に惹かれるのはバランス感覚に富んでいるからだと思います。

また、親しみを持って身につけて欲しいという想いから敢えて安価な素材を使用しているのと同じことを伺い感じたことですが、中世に作られたジュエリーを扱った骨董屋はイタリアにはまだ多くありまして、そこに並ぶものをよく見ると分かるのですが、ルビーやサファイアといった宝



「花紅柳緑」



工芸 片山 寛美 カタヤマ ヒロミ

愛媛県在住

所属：学習フォーラム会本部専任講師ワイヤーレースジュエリー

経歴：ビーズアートジャパン大賞、佳作／トリコロール芸術の翼奨励賞／日伊教育ノーブル芸術金賞／愛と平和の芸術家大賞／現代人気美術作家年鑑年間グランプリ 2015／日光東照宮 400 年式年大祭・特別奉納行事真秀展奉納作家・芸術奉納記念切手起用

日伊芸術鼎談

「芸術が社会に成すべきこととは？」

石ではなく、色彩が似ていて綺麗な石で代用することもあったそうです。

「春」というテーマを表現することを重視するか、ジュエリーとしての「美しさ」を表現することを重視するかで、作品がアートなのかクラフトなのか方向性が変わるように思いますが、如何でしょうか。

片山 難しい質問ですね。「春」の美しさを表現することを目的として物語性のある作品を制作しましたが、そこにはジュエリーとしての美しさは欠かせません。

ペトリオーリ 確かに片山先生の作品から、「春」の華やきという温かい雰囲気伝わってきます。

まるで先生は一九世紀のアーティスト・アンド・クラフト運動のように生活と芸術との共存を図っているように感じます。

片山 普段の生活の中にある美しさを作品の中に閉じ込めたいと考えています。良いものを作ろう、綺麗なものを作ろうといった気持ちではなく、例えば、夕焼けに感動した時のその想いを封じ込めるようにして作っています。

ペトリオーリ 心の動きや感動というものを封じ込めるといふことは、物語を感じさせたい訳ですね。

片山 もう一つの作品「悠久の調べ」(※二三頁)は、昨年一〇月に日光東照宮で行われた「真秀展」への出展が決まった際にまず浮かんだイメージが鳳凰だったのです。鳳凰を七宝で作り、そこからどのような作品にするか構図を考えてゆきました。

やはり東照宮という格式の非常に高い場所で展示ということもあり、品のある作品になるように気を付けました。



「悠久の調べ」

ペトリオーリ イタリアでは日本の菩提寺のように、家族代々祈りを捧げるために参りする教会があります。

安息日のお祈りとは別に、何か大切なことをそうした教会にお祈りする際に自分の分身や身代わりなるようなもの、多くが普段から身に付けているジュエリーとなるのですが、それらを信仰のために寄付することがあります。

先生の日光での経験は、芸術が成すべきことのひとつだったのでしょうね。

本日はありがとうございました。